

「美しい」「きれい」「かわいい」と環境教育

若林清子

目次

- 1 はじめに
- 2 「美しい」「きれい」「かわいい」という言葉
 - 2-1 子どもの言葉
 - 2-2 この花は「美しいか」
 - 2-3 「美しい」という言葉と「きれい」、「かわいい」という言葉の持つ違い
- 3 客観から主観へ
 - 3-1 価値判断の基準
 - 3-2 客観へのゆり戻し
- 4 環境保全と「かわいい」
 - 4-1 私たちが自然を守ろうと思いつく理由
 - 4-2 自然を守りたいという気持ちと現実
 - 4-3 「かわいい」「きれい」、そして「かわいそう」という厄介な感情
- 5 「きれい」「かわいい」から環境保護を考えるには
 - 5-1 主観を大切にした環境保全の必要性
 - 5-2 多くの人が環境保全をしたいと思うためには
 - 5-3 「かわいい」や「きれい」を使った環境保全の例
 - 5-4 「かわいい」「きれい」を使った環境保全の大切さ

1 はじめに

いつのころからか、会話の中で「美しい」という言葉は使われなくなり、「かわいい」とか「きれい」とかという言葉が、その代わりに使われるようになってきた。私が環境教育を考えると、全く関係ないと思われるこの言葉の変遷に、実は大変大きな問題が含まれているのではないかと考えている。

それは、「かわいい」とか「きれい」とかとい

った評価で、多くの人は、自然を考えているように思われるからである。そして、そういった評価を生み出す感性の状態が、環境保全にとって、必ずしも適正な判断を導き出さないと考えられるからである。

では、「美しい」と言う評価で考えたとき、私たちはどういう行動をとるのであろうか。「美しい」と「かわいい」「きれい」との間には、どのような違いがあるのであろうか。

実は、私たちは、無意識のうちに、「美しい」と「きれい」「かわいい」を使い分けており、この言葉の変遷は、また、私たちの環境へのかかわ

平成18年10月2日受理

り方をも表していると考えられる。では、「美しい」が使われなくなり「かわいい」や「きれい」が使われるのは、どのような経緯からであろうか。

「美術史学」や「美学」の立場から、この問題について少しでも思いを巡らすことがあるならば、「美しい」と言う言葉が日常の会話から消えていっている現象は、大変由々しき問題であると感じられるはずである。

ここでは、「美しい」と「かわいい」「きれい」と言う言葉に焦点を当てて、環境問題や環境教育について考えていきたい。

2 「美しい」「きれい」「かわいい」という言葉

2-1 子どもの言葉

日常的に子どもたちの言葉を聴いていて、「美しい」という単語が出てこなくなったことに気づく。子どもだけでなく、大人の会話においても同様のことに気づかされることがある。

今や、「美しい」は、死語に近づきつつあるように思われてならない。そしてもし、「美しい」という単語が死語になっていくのであれば、「美しい」という概念に、何か社会的な変化があったのであろうか。また、美意識自体に変化があったのであろうか。

子どもたちの中で美しいと言う言葉が消えていっている現状を把握し、それがもたらしている現象を見てみたい。

2-2 この花は「美しいか」

毎日のように会っている顔見知りの何人かの子ども（小学校5年生、ある進学塾に通っている子どもたち10人うち男子7人女子3人）に、教室に飾られている花瓶の花を指差して、「あの花は好き？ どうして？」と何度か別々に質問を試みた。

すると「どうして」の答えは、1)きれいだから 2)かわいいから の二つの言葉で表現されることがわかった。しかし、美しいという単語は出てこなかった。反対に、「あの花は、美しいと思う？」と質問すると、肯定する言葉が返ってくる。「美しい」の反対語は「醜い」、「きれい」の反対語は「汚い」と答えるところを見ると、「美しい」と「きれい」は違った言葉であると認識し

ていることがわかる。彼らが、学校や塾の授業や問題集の中で、「美しい」と言う単語自体には慣れていることがわかっている。また、学校や塾の授業や問題集で、「美しい」が、多く出てくるのは、その言葉が少し前までは日常的だったことを現しているともいえるであろう。

次に、子どもたちに、普段の生活で「美しい」と言う言葉を使わないかと問うたところ、ほとんどは使わないとい答えが返ってきた。理由を聞いても、はっきりした答えは得られなかったが、とにかく使わないとのことであった。

また、今度は、反対に、どういう花が美しいかをたずねたところ、ほとんどの子どもに美しいと言う形容詞で表されるものは、「バラ」「サクラ」などであった。花の名前自体を良く知らなくていろいろな花の名前を言っても半分以上知らない子どもおり、また、非常に詳しくこちらの知らない花を言う子もいて、質問する対象の子どもたちにも色々なレベルがあることが分かる。誰もが花とって思い浮かべるものが、単にサクラやバラなのかもしれない。

しかし、この「バラ」を実際に見ると、「きれい」と言う言葉が返ってくる場所を見ると、やはり、日常では「美しい」とは言わないらしい。

これらのことから、子どもたちの生活の中で、「美しい」という単語自体は知っているが、一般会話では通常使わないということが、わかるのではないだろうか。もちろん、たった10人の子供の話でしかないが、これらの子供たちは皆学校が違っており、おそらくそれぞれの学校で使われている言葉を代表していると考えて良いから、私の暮らしている地区の子どもたちに共通した現象であると言うことが出来るであろう。

これを、より一般的に見るために、子供向けの本の題名から見てみよう。Amazon.com (2006年9月7日)で調べたところ、きれいで42件、美しいで67件（但し実際に使われているのは30件）かわいいはで199件の本が、検索された。

きれいは、名詞を修飾しているだけではなく、他の用法も見られることが特徴で、特に片付けや手洗い・書き方などに関する本も見られた。また、修飾する単語も、動植物から、街・国のような抽象概念まで幅広く、水や町、空気・川といった自

然に関するものも見られた。提唱年齢も、幅広く、幼児向けの本も多かった。汎用性に富み、抽象的な概念を表す言葉から具体物に到るまで、ほとんどどんな分野にも使われる言葉である。

美しいに関しては、もう少し、偏った使用法がされていた。いくつかのグループに分けると、

- ・ お姫様、娘、女の子の名前
 女の子に関するもの
- ・ 自然、地球、水、川、森、四季、風景
 自然に関するもの
- ・ 国、町、村、日本
 人工的で概念的なもの
- ・ うた、詩歌、はなし、民話
 言葉やうたに関するもの
- ・ いのち、からだ
 身体に関するもの
- ・ 数学、絵、服装、おくりもの、大聖堂
 やや具体的に人間の作り出したもの
- ・ クモの巣、もの(米)
 具体的な自然のもの

これらを見ると、抽象的なものが多く、具体的なものは、どちらかと言うと少ないところが、きれいとは違っていることがわかる。また、美しいで検索できる本は、売り切れのものが多く、古いものが多いように思われる。対象年齢もやや高く、幼児と言うよりも、中学年以上のものが多かった。

かわいいについては、明らかに他のものよりも検索にかかる本が多く、一番子どもに親しまれている言葉だということが出来る。主に、「かわいい+動物名」という形で、幼児向けの動物の絵本に多かったのも特徴的だった。他の二つの言葉と比べて、より具体的な事物に使われる例が多い。

ここでも、やはり、「かわいい」や「きれい」のほうが「美しい」よりも普通生活の中に根付いた言葉であることがわかるのではないだろうか。

このように、子どもたちの日常の言葉の中から「美しい」は使われなくなっているといえよう。

2-3 「美しい」と言う言葉と「きれい」、「かわいい」という言葉の持つ違い

『大辞林第2版』(三省堂)で、「美しい」と言う言葉を引いてみよう。

〈形〉[文] シク うつく・し

[一] (1)視覚・聴覚的にきれいで心を打つ。きれいだ。(2)精神的に価値があって、人の心をうつ。心に深い感動をよびおこす。清らかだ。

[二] (1) (肉親に対して) しみじみとした深い愛情を感じるさま。いとしい。(2) (特に小さいもの・幼いものなどについて) 小さくて愛らしい。かわいらしい。(3)細部まできれいに整っている。申し分ない。(4) (連用形で副詞的に用いて) (ア)心や行動がさっぱりしているありさまを表す。きれいさっぱり。(イ) 穏やかに。静かに。とあり、英語では、beautiful; pretty; sweet; lovely; charming; handsome; good-looking; noble-minded; pure in heartと訳されている。(『EXCEED和英辞典』三省堂)

同様に、「きれい」を引くと英語では、beautiful; pretty; lovely; fine; good-looking; handsome; clean; neat; tidy; clear; pure; fairとあり、国語辞典では、(形動) [文] ナリ

(1)目に見て美しく心地よいさま。美麗。(2)耳に聞いて美しく心地よいさま。(3)よごれなくさっぱりしているさま。清潔。(4)やましい点のないさま。けがれのないさま。潔白。(5)男女間の肉体的交渉のないさま。清純。純潔。(6)きちんと整っているさま。整然。(7) (「きれいに」のかたちで) 残りなく事が行われるさま。すっかり。「中世以降一般的のも用いられるようになり、「美」を表すさまさまの意を派生し、次第に「うつくし」によってかわって広く用いられるようになった」

「かわいい」を引くと、英語ではlovely; charming; sweet; dear; darling; pretty; nice; cute; little; tinyに訳され、国語辞典では
かわい・い かはいい【可愛い】(形)
[[かわゆい]の転。「可愛」は当て字]

(1)深い愛情をもって大切に扱ってやりたい気持ちである。(2)愛らしい魅力をもっている。主に、若い女性や子ども・小動物などに対して使う。(3)幼さが感じられてほほえましい。小さくて愛らしい。(4)殊勝なところがあって、愛すべきである。(5)かわいそうだ。いたわしい。ふびんだ。

とある。

辞書で見ると、現代においては、「美しい」と、clean以外の意味での「きれい」との間には、

大きな違いはないように思える。また、古典においては、「美しい」は「きれい」と言うよりもむしろ「かわいい」に近い言葉であったようである。

しかし、実際に使われるとき、「美しい」には、「きれい」よりも、抽象的で、より規範的で客観的な要素が強い。実生活で使われるとき、「きれい」のほうがより口語的である。

これは、哲学の領域で、「真善美」といわれるように、「美しいこと」すなわち「美」には、「真」すなわち真理、「善」すなわち「倫理的に良いこと」と密接な関係があるからであろう。「きれいに比べて」より普遍的なイメージのものを表すときに用いられる傾向にある。Artが「美術」と訳されてより、もともと「美しい」が持っていた古典の意味から、今の意味へと日常会話の中で変化したのであろう。

「美しい」人といったとき、「きれい」な人と比べて、道徳的規範に当てはまる品格のある人を想像する。「きれいな」国といわず「美しい」国というのも、単に見た目に美しいのではなくて、規範のある整然とした、あるいは品格のある国をさしているからであり、「理想の」という言葉と同様の意味で使われている。

これとは対照的に、「かわいい」「きれい」はより主観的である。「かわいい子」といったときに、対象となった子は、客観的にかわいくなくても一向に構わないのである。言った本人にとって、かわいければ、それでいいのである。もちろん共有されるところも多いが、個人的な感情の発露であって一向に構わないのである。そして、かわいいと言うときには、一般に自分よりも目下のものをいとしく思ったときに使われる。「かわいい」神様や仏様はありえないし、「かわいい」偉人とは言わないのである。

日常生活の中で、私たちは、美しい>きれい>かわいい の順に、自分より上のもの>同等>目下と使い分けているともいえるであろうし、客観的>主観的の順に並んでいるともいえるのである。

このように見てくると、私たちの価値判断の基準は、「美しい」で表現される客観的な評価を捨てて、「きれい」あるいは「かわいい」といった主観的な評価に傾いているといえるのではないだ

ろうか。また、何が正しいか、普遍的かというよりも、今の自分の感情に忠実であろうとしているとも言えるのではないだろうか。

3 客観から主観へ

3-1 価値判断の基準

前章では、「美しい」と「きれい」「かわいい」の違いについてみてきたが、私たちの日常生活を見ると、「美しい」と言う基準から「きれい」「かわいい」へと変化している。

この価値判断の基準がいつどこで変わっていったかを考えるとき、いくつかのキーワードに出会う。

ひとつは、「通知表」である。新学習指導要綱による2002年の文部省の通達によって、通知表の評価が、相対評価から絶対評価へと変わった。相対評価は、クラスの中での順位や偏差値などによって、自動的に成績を決めるものであって、客観的な側面が強調されている。絶対評価は、その子どもの到達度を見るものであって、その判断は先生の裁量に任される。ゆえに、客観的な評価を目指すものでありながら、先生の個人的な判断に頼る側面が大きく、主観的な評価と言うことが出来よう。この通知表の改変は、子どもたちに、先生というたった一人の大人によって評価が決められると言う、きわめて個人的な価値判断による評価の世界をもたらした。特に多くの都道府県立高校の受験において内申書による評価が大きな比重を占めるに到ると、たとえそれがどのように客観的であろうとも、生徒からは主観的な評価を危惧するものとなった。おそらく、このように主観に基づく評価がその生徒の進学に大きな影響をもたらす状況は、一般的な価値判断の軸が客観から主観へと移っていくことを増長したのではないかと思われる。

また、「ペット」という言葉が、「コンパニオンアニマル」に変わったことも、価値判断の変化を表している。愛玩動物は、飼い主には家族同然であっても、他人から客観的に見れば単なる動物である。それを、「コンパニオンアニマル」という言葉で示すように、家族として公然と扱うことを社会が認めるようになった。これも、主観的な価

値観が客観的な価値観よりも大きな力を持つようになったことを表している。

他にも、もはや定着した感のある「ファッションの多様化」や「個性の尊重」など、周りに合わせるよりも自分が主体的になって表現する方向に向かっていると言う点において、やはり、客観から主観へと価値判断の基準が変化してきたことを表しており、今やその流れは止めることが出来ない。

3-2 客観へのやり戻し

しかし、ここに来て、客観を希求する動きも出つつある。「美しい日本」「美しい国づくり」という言葉をスローガンに掲げた安倍信三氏の自民総裁選挙当選（2006年9月20日）などもその流れの中での出来事と捉えることが出来よう。「美しい日本」が示す「日本」がどのようなものであるかは、抽象的過ぎて何を表しているのかわからない。しかし、「美しい日本」という言葉の中には、共同体への帰属意識を高め、社会の中の一員としての個人という立場が強調されて示されている。これは、「きれい」や「かわいい」という個人的な立場から、「美しい」で示される何らかの客観的で集団的な価値判断の基準を引き戻そうとしているということが出来るかもしれない。これは、価値判断が、あまりにも個人的・主観的になってきていることへの、社会全体の危惧観を表しているともいえよう。

電車の社内での化粧に見られるような公共の場の私物化や、不法投棄などの公共性のなさ、携帯電話の普及により人間関係の希薄さとそれともなう社会性のなさなどに対して、多くの批判を新聞や雑誌、テレビなどで目にする。元来日本は、「恥」の文化といわれてきたが、今や「恥」は死語になり、人目をはばからない風潮が広がってきているとマスコミなどで警告している。ニートが増えて、働かない若者が社会問題になっている。これらの批判は、皆、ある意味で客観的な価値判断を見直し、そこに立ち返ろうとする動きであると捉えることも出来よう。

しかし、多くの批判があるにもかかわらず、このように、「美しい日本」とわざわざ言わねばならず、人目をはばからない風潮に歯止めがかから

ないということは、それでもなお、主観化への道を私たちがたどっていることを表しているものともいえる。

4 環境保全と「かわいい」

4-1 私たちが自然を守ろうと思いつく理由

私たちが自然を守ろうと思うのは、どのような時だろうか。専門家は、研究結果に基づいて、より理想的な形での環境の保全を考えるだろう。しかし、多くの人は、何が環境にとっていいかを最新の研究結果に基づいて考えているわけではない。また、それを知る機会にも遭遇しない。中でも特に関心がある人だけが、自発的に書物を読み、インターネットから情報を探し、関心を持つもの同士のネットワークの中で最も良いと思われることを実行するのである。ほとんどの人は関心があったとしても、その中できちんとした知識を得ることの出来る人は少なく、自分の娯楽よりも環境を優先する人はいまだ少ないのが現状である。

では、どのような理由で自然を守ろうと人は考えるのであろうか。

ほとんどの人は、お気に入りの景色や花を来年も見たいと思うから、或いは、虫の好きな子供のために虫取りの出来る環境を守りたいから、出会った鳥や動物がかわいかったからといった、ごく個人的な理由から自然を守りたいと思うのである。また、きれいな空気を吸いたいとか、健康になりたいかと思うときに、自然を守ることが必要だと気づくからである。ほとんどの人にとって、本当に自然にとって何がよからうかと模索するというよりも、自分が自然に対して優しい気もちになることをすること、たぶん自然の摂って優しいであろうと思われることをすることが、自然を守ることなのである。

このように考えると、実は、「自然を守ろう」と考えるときの、「自然」は、私たちにとって、「きれい」や「かわいい」で表される、きわめて主観的なものだけということが出来る。このときの「自然」は、決して、生態系から見たものでもなく、環境保全の立場から考えたものでもないのである。

4-2 自然を守りたいという気持ちと現実

私たちは、日常の生活の中での出来事の中から、主観的に、自然を守りたいと思うわけであるから、そこには、大きな落とし穴がある。

第一に、日常の生活の質を下げたまで、自然を守ろうという気持ちはないということである。今の生活を維持しながら、生活の質を、自然を守ることによって、向上させたいと願っている。ゆえに、アメリカは京都議定書に調印すらしようとしない。先進国と途上国が互いの利益をめぐって大きく対立するのも、まずは生活ありき、経済ありきだからである。自然は、生活環境の一部としてしか考えられていないと言ってもいいかもしれない。しかし、これについては、ここでは触れないことにしたい。余りにも大きな問題で、一朝一夕に解決されるものではない。一個人の努力と同時に、地球規模の取り組みが必要である。

次に、問題なのは、「自然を守りたい」というときの「自然」は必ず、自分にとって心地のいいもの、好きなものに限定されているからである。決して、生態系を考えてのことではない。むしろ、害になっていることも多いのである。

アメリカでの、オオカミの駆除によって、守られるはずシカが増え過ぎて森林を食い荒らし、結果シカ自体も数を減らすことになった事例がその際たるものである。これは、1983年全米批評家協会賞撮影賞を受賞した映画『ネバー・クライ・ウルフ』の題材や「プロジェクト・ワイルド」のネイチャーゲーム「オー・ディア!」の素材にもなっている。また、近年、イエローストーンでは、絶滅したオオカミをカナダより移住させるというプロジェクトが行われ一定の成果を示しており、知床でも導入が検討されたことが記憶に新しい。長い間、羊やヤギなどの家畜を荒らし、動物を殺すとして、駆除されて続けてきた悪者のオオカミが、実は生態系の頂点に立って、生態系をコントロールしていたことに、人間はやっと気づいたのである。シカのような草食動物を優しく正しいもの、オオカミのような肉食動物を悪者あるいは悪魔として、取られてきた西洋文化の考え方を根底から覆すような事例であった。

近視眼的に、眼の前の事象だけを捉えて、善悪を決めることは出来ないのだと、この事例は訴え

ている。

餌付けの問題も、昨今マスコミに取り上げられるほどの被害を出すようになってきている。日光のサル、宮島のシカなどが人を襲う被害は、一人ひとりの「かわいいからちょっとエサをやってみた。」といった、善意のほんの些細な行動の積み重ねが大きな被害を招いている。多くの場所で「えさを与えないでください。」の看板の前でさえ、エサを与える人が後を立たないのが現状である。そして、人に慣れ、人がエサを持っていると知った動物が今度は、エサを目当てに人間に襲い掛かり始めるのである。しかし、襲われ始めてから、対策をとってもなかなかうまくいかない。特に観光地では、襲われた経験のない人が多く押し寄せるため、注意を呼びかけても応じない人も多く、問題になっている。

しかし、餌付けは特定の観光地だけの問題ではなく、いたるところで行われており、目の前の「かわいい」や「かわいそう」が後でどのような問題を引き起こすかなどについては、ほとんどの人が気に留めないのが現状である。

これらの例は、特別なものではない。特定の好ましくかわいい動植物のみを守ることや、誤った愛情によって自然を守るつもりでしたことがかえって生態系に害を及ぼし人間に被害を与えることは、いたるところで起きている。そして、深刻な被害が起きて始めて、自治体が動き、本当に大事故が起きてはじめて多くの人が認識をするという構図がある。

植物についても考えてみよう。一面のお花畑についても、実は、知らないところで、多くの植物に害を与えている。一面のサクラソウやヒマワリ畑を見に、多くの観光客が訪れ、自然を満喫している映像をテレビのニュースなどで見る機会があるであろう。しかし、そのお花畑の周りの花にとってみれば、花粉の媒介に必要なムシたちを一面のお花畑の花に奪われ、受粉の機会が減るのである。ムシは効率よく蜜を求めるので、どうしても、一面のお花畑があるとそちらに行ってしまう、地味で群生しない自然の状態の野草に飛んでくる確率が減るのである。美しい自然と思われるものが、実は人工のもので、本当の自然や生態系に大きな影響を与え、時には破壊をもたらすかもしれない

ことに誰も気づこうとはしない。

4-3 「かわいい」「きれい」、そして「かわいそう」という厄介な感情

どんなに、間違っているとしても、生態系の保全のためにはおかしいと分かっているとしても、人は、「かわいい」「きれい」という感情を捨てて、純粋に客観的に保全に取り組むことは出来ない。また、「かわいい」ものを「かわいそう」に思う感情にそむくことは出来ないのである。

自然観察会で、いくら、外来種のカブトムシをいかなる事情があっても野外に放してはいけないと指導したところで、飼いきれなくなれば殺すのはかわいそうなので放してしまう。飼いきれなくなった猫は処分するのは忍びないという理由で、野良猫にされてしまう。飼っている動物が生態系に与える影響を考えて、遺棄するのではなく殺すようにと指導すると、多くの親から「命の大切さ」や「子どもの教育上の問題」を楯に非難され、決して良い結果を得ることはできない。

しかし、現実には、外来種のカブトムシが出現することで生態系に大きな影響を与えるし、遺棄された動物によって生態系がかく乱されている。時にはそれが人間に害を及ぼしていることもある。しかし、それでも、遺棄が後を絶たないのは、「かわいそう」だからである。

この厄介な「かわいそう」という感情はごく自然のもので抑えることは出来ない上に、人間が人間であるために必要であり、おそらく、もっとも必要な感情のひとつであろう。それを、無理に曲げることは、人間性に背くことであり、許されないことなのである。

しかし、「かわいそう」という自然の感情では、自然を本当の意味で守ることは出来ないのである。目の前にあるものだけを、主観的に見て行動するのでは、複雑で奥の深い生態系を保全することはとてもかなわないのである。より、大きな視野に立って、何が「かわいそう」で何をすべきかを、考える必要があるのではないだろうか。

5 「きれい」「かわいい」から環境保護を考えるには

5-1 主観を大切にした環境保全の必要性

人間の感情の自然な発露を大切にしながら、なおかつ、本当の意味での環境保全を行うは、どのようにしたらいいのであろうか。

今までも、学校や観察会などを通じて、いろいろな環境教育がなされており、大きな成果を挙げている。しかし、これらは、多くの場合、知識を高めることに重点を置いており、興味のない人にまで影響を与えることはなかなかむずかしい。学校教育はともかくも、観察会に来る人は、ごく限られている。多くの、環境に興味のない人たちに、本当の意味で自然保護を行ってもらうまでには到っていない。

全く興味がない人を取り込んで自然を守ることなくしては、自然保護あるいは環境保全を行うことは不可能である。ゆえに、私たちは、もっとも自然な感情である、あの厄介な「かわいそう」を味方につけなくてはならないのではないだろうか。

もし、「かわいそう」を味方につけて環境保全を行えば、誰もが知らないうちに環境保全をすることが可能になるのではないだろうか。

「外来種のカブトムシを放すことは森に「かわいそう」で、いけないことだとも皆が思えば、かわいそうだからと言って遺棄されるカブトムシの数を減らすことが出来るのではないだろうか。「動物に餌付けをすることはその動物にとってかわいそうだ」と多くの人が思うようになれば、「かわいそうだからエサをやらない」ということは、たやすいことなのではないだろうか。

ほとんどの親は、子どもの将来のために、子どもの意志に背いても自分の子供にしつけを施している。ただ闇雲に子どもの望みどおりに物を与えることは、いけないことだと教育書にあり、常識的にもそう思っているから、子供が泣いても、いけないことはいけないで突き放すことが出来る。「・・・が出来ないと将来かわいそうだから。」といえ、子どもに対して、厳しい態度で望むのは、多くの親に共通するところである。

同じように、自然にしても臨むことは、可能な

はずである。「こんなことをしては、将来この動物にかわいそうだ」と心から思えば、いくら擦り寄ってエサをねだっても、突き放すことは出来るはずである。

私たちが本当の意味での環境保全を行うには、知識として客観的に正しいというだけでなく、感情面でも主観的に正しい、言い換えれば、心地よいと思う必要があるのではないだろうか。

5-2 多くの人が環境保全をしたいと思うためには

今まで述べてきたように、多くの人が、自然を守り環境を保全していくためには、自然を守り環境保全をすることが、主観的にも正しく、心地よいものでなくてはならない。データとして正しく専門家の間で理解されているということだけでは、なかなか一般社会での解決にはならない以上、感情的に受け入れられるものでなくてはならない。

しかし、多くの専門家は、研究の段階で主観的なものを排除し、なるべく客観的に物事を説明し結論を導く。主観や思いこみは、研究にとっては一番恐れなくてはいけないことであり、それをいかに排除して、結論を導くかが科学にとっては大切なのである。これがなされない研究は信頼性のないものである。しかし、一方で、この手法では、多くの、関心のない人に研究で得られたものを浸透させることは出来ない。関心のない人にとって、客観的な結論を導き出すための多くの実験や観察などは、時間をかけて考えるには及ばないものである。また、その結論を導き出す過程を理解するための知識は、多くの人にとっては無縁なものである。多くの問題については、専門家が理解していれば、問題ないのであるが、環境の保全に関しては多くの人がそれぞれの立場で考えていかないと実行不可能なものである。それほどに、日常生活と結びついているのである。

このような、環境保全のための研究の成果は、日常生活の中でも、いろいろな形で紹介されている。学校教育でも、環境学習は大きな柱のひとつとなっており、社会や理科、総合学習などの時間に取り上げられている。メディアで紹介されることも多い。多くの会社で、それに基づいた製品開

発がなされている。地方自治体が、ゴミの分別などの形で住民に課しているケースも多い。

しかし、学校教育にしても、会社や地方自治体の取り組みにしても、多くの人にとっては皆受身のもので、実際に自分で取り組んでいるものではない。自発的に、主体的に行っているものは、少ないのが現状であろう。

では、自発的に、多くの人が、環境保全に対して関心を持ち、行動するためには何が必要であろうか。まず必要なのは、環境保全に対する知識ではないだろうか。そのためには、研究者の導き出した結論を、主観に訴える形で、一般の人たちの受け入れやすい形で提示する必要がある。受け入れやすい形にするとは、具体的にどのような形であろうか。

それに必要なのは、具体的な事例と、それを実行したいと思うに足る何か心理的な後押しである。どうすれば、生活の中で、時間と労力をかけて、環境保全に取り組みたいと、思うことが出来るのであろうか。それには、時間と労力をかけてもかまわないと、思わせる何かが必要である。

そのためには、対象物が、「かわいい」あるいは「きれい」なもので、それに対して、「かわいそう」という気持ちを起こさせることが出来れば、受け入れられやすいということが出来るのではないだろうか。「かわいい」や「きれい」はきわめて主観的なものなので、客観的に「美しく」ある必要はない。全ての人に受け入れられなくても、多くの人にとって、「かわいい」と思い「きれい」であればよいのである。

5-3 「かわいい」や「きれい」を使った環境保全の例

じつは、私たちの身の回りで、この「かわいい」「きれい」を使った環境保全の試みは、意識することなくずいぶん前から始まっている。

「きれい」については、多くの自然が「きれい！」で表現されているところを見ると申すまでもないであろう。ここでは、「かわいい」について考えたい。

その例が、宮崎駿監督の映画、1988年4月公開の『となりのトトロ』である。この映画の舞台となった狭山丘陵の自然を守るために『トトロのふ

るさと財団』が設立され、トラスト運動のさきがけとなった。この映画は、「トトロ」のかわいらしさを前面に出しながら、その背景となった里山の暮らしを見直すきっかけをもたらした意義は大きい。映画が封切られた1988年当時はまだ自然保護の対象でなかった、2次林である里山の自然の大切さを人々に印象づけ、それ以降いろいろな地域で里山の保全活動が始められるきっかけを与えた。いまだに「トトロ」のキャラクターグッズは売れ続け、日本のどこの幼稚園や保育園でも「トトロ」のうたが歌われないところはないとあってよい。まだ、自然に対する関心も持ちえないような、また、実際には里山を知らない、小さな子どもたちの心に里山に対する郷愁を呼び起こし続けているこの映画の力の大きさは計り知れない。

実際、今でも、多くの子どもたちはどんぐりを見て、「トトロ」のお土産を連想し、どんぐりが林になることをイメージする。今まで関係がないと思っていた林や木々が「トトロのおうち」として、大事な、守らなくてはいけないものであると認識する。大好きなトトロに会いたいから、林や木を大切にしなければいけないと考えるのである。そして、大好きなトトロを通じて、いつの間にか里山の保全について考えるようになるのである。

英国湖水地方でナショナル・トラストのさきがけとなったのが、『ピーター・ラビット』の作者ビアトリス・ポターであることを思い起こすとその類似性を感じる。ポターが遺言によって、1943年、所有していた4000エーカー以上の土地と15の農場をナショナル・トラストに寄付して以来、絵本の世界そのままの風景や建物が残され、世界中から多くの観光客が訪れる人気の観光スポットとなっている。日本からも多くの観光客が訪れ、「かわいい」動物たちが住む「きれい」な田園風景に魅せられ、知らず知らずのうちに絵本の中の自然を愛し、守ることに参加している。

自然に魅せられての観光は、今まで価値があるとは思われずにいた自然が、実は人々を魅了するだけの価値があることを人々に認識させ、それを守ることが生活を豊かにすることにつながることを知らしめる効果がある。特に、ナショナル・トラスト所有のビアトリス・ポターゆかりの地は、

単なる田園風景ではなく、自分の大好きな「かわいい」動物たちの住んでいる土地として特に主観に訴えるものがあり、多くの観光客がそこを訪れる。彼らは、自分の大好きな絵本の風景の一部となることを目的地しているために、その風景を特に大切にし、それが、環境の保全につながっている。

これらは、「かわいい」や「きれい」をキーワードにした環境保全として機能している例であると言っていいであろう。

このような「かわいい」や「きれい」から来る環境保護や保全の運動は、心理的に無理がなく、小さな子どもから大人まで巻き込んで、無理なく行うことが出来るところが、多くの環境保全活動に比べて優れている。

5-4 「かわいい」「きれい」を使った環境保全の大切さ

今まで述べてきたように、「かわいい」「きれい」をキーワードにした環境保全を行うことは、環境に興味を持たない多くの人をも巻き込むことができる。あえて自然を守ろうとか環境の保全をしようとかという意識がなくても、日常生活の中で環境保全に取り組むことを可能にする。

このことは、実は、環境に興味を持たせて環境保全に取り組むよりも大きな力を持つ。

多くの人は、日々の生活に追われて、なかなか環境についてわざわざ考える時間もゆとりもない。しかし、「かわいい」とか「きれい」とかという言葉で、環境についてごく主観的に感じることは、環境について考えるゆとりや環境にない人たちに、環境についての考えることに出来る取掛かりを与えることが出来る。

都会に住む小さな子どもとその親や、キャラクターやゲームが大好きな小中学生、ファッションに夢中な若者など、「かわいい」あるいは「きれい」なものに目のない、一見、環境になど関わりを持たないような人たちを自然に取り込んで、環境について考えさせるきっかけを与えるものとなりうるのである。

私たちは、環境保全を考えると、余りにも科学的な側面にばかり目を向けてきた。しかし、そればかりを強調することは、多くの人から環境に

対する興味を失わせる結果ともなってきた。もちろん、科学的な根拠のない、間違った環境保全ほど害のあるものはないのであるが、科学的な側面ばかりを強調しては、関心を持ち、少しでも行動する人を増やすことは難しい。関心のない人をいかに取り込むかが大切であろう。

「かわいい」や「きれい」をうまく使いこなすことが出来れば、環境問題に自然に取り組むことの出来る人は多いのである。そして、知らず知らずのうちにも、環境について考える機会を持つことが出来れば、その中から、より深く知りたいと思う人も出来るであろう。

そういう機会を作る、最初の一步として、「かわいい」「きれい」を活用する方法を模索する必要がある。

参考文献

3-1、「通知表」；『教育改革国民会議報告 - 教育を変える17の提案-』平成12月22日 教育改革国民会議

「絶対評価で通知表が変わる」四国新聞,2002/7/7

「絶対評価 - 子どもと保護者の不安、どうなる入試02/9/9」海部HP

<http://www/human/tsukuba/ac/jp/^hkaiho/bewnese.html-18k->

「中学校の内申書議論 学生の論点」学生検索キャスファイ

<http://www.casphy.com/>

4-1 「オオカミ」

； Earth Watch Institute “Moose and Wolves” (Peterson and Page, 1988)

(これは、アメリカのスベリオル湖にあるアイル・ロイヤル島でのオオカミとヘラジカの個体数の長期観察である。このプロジェクトは現在も継続して行われている。この観察によって、捕食者-被捕食者間のシステムにおける個体群の急増と激減の影にある原動力が明らかになった。この結果は、オオカミの対する一般諮問の考え方を換え、野生生物と管理世界的な大上戸の再導入に革命をもたらす助けとなった。)

「知床におけるオオカミ再導入の検討」知床博物館研究報告第26巻

「餌付け」；栃木県・日光市サル餌付け禁止条例、2000（平成12）年3月30日条例第9号

「(鳥獣保護区特別保護区の指定について(1)特定鳥獣地保ふお管理計画について)」広島県環境審議会第5回自然環境部会議事録、平成16年9月17日

「宮島でのシカの被害」、広島大学大学院理学研究科附属宮島自然植物実験所（デジタル館） <http://www.digital-museum.hiroshima-u.ac.jp/^miyajima/newpage2htm>

5-3 「財団法人 トトロのふるさと財団」《ナショナルトラスト・トトロのふるさと基金》

<http://totoro.or.jp/>

『ナショナル・トラストエリアの観光利用に関する研究 - イギリス湖水地方での日本人観光客を題材として -』(「観光に関する学術研究論文 - 入選論文集 -」日本財団図書館1996、真板照夫・橋本俊哉・海津ゆりえ・小林英俊

<http://nippon.zaidan.info/seikabutsu/1996/000867/contents/005.htm>